

# INMP ニュースレター第 12 号

2015 年 12 月



International Network of  
Museums for Peace

## バーバラ・レイノルズの平和的業績を讃えて（1915～2015）

今年 1945 年 8 月に第二次世界大戦が終結し、広島・長崎へ原爆が投下されてから 70 年目です。同時に、「広島ワールドフрендシップセンター（WFC）」の創立 50 年、米国オハイオ州のウィルミントンカレッジ「ピースリソースセンター（PRC）」の開設 40 年の記念の年でもあります。

WFC は、広島が壊滅した日から 20 年目の 1965 年 8 月 6 日に、世界中から広島を訪問する人々が被爆者や広島の市民と会い、被爆体験を共有し平和を学ぶ場所として生まれました。以来数万の広島巡礼者、旅行者の最初の滞在場所となっています。10 年遅れて開設し、日本国外で最大の広島・長崎史料を所蔵する PRC は、WFC の姉妹施設とされており、この蔵書は研究者、学生、平和運動家、教育者等にとって原爆の悲劇を学ぶ重要な資料となっています。どちらのセンターも、アメリカ人でクエーカー教徒の平和運動家バーバラ・レイノルズ（1915～1990）が始めたものです。バーバラは被爆者の存在を世界中に知らせるためにその生涯を捧げ、他の誰よりも被爆者たちの衷心の願い「ノーモアヒロシマ、ノーモア・ナガサキ、ノーモア戦争」を発信しました。

バーバラは 1951 年、アメリカ政府に派遣され ABCC（原爆傷害調査委員会）で被爆した子どもたちの発育に対する放射能線の影響を研究する夫・アール・レイノルズについて初めて来日しました。5000 人ちかくの子どもたちを調査した成果により、アールは放射線被爆研究の世界的権威の一人となりました。バーバラは日本で 18 年暮らし、被爆者を助けその苦悩を国外に知らせるために尽力しました。彼女は広島を世界平和の中心地とすることを構想し、被爆者たちと世界とを結ぶため

に WFC の建設を志しました。1952 年のノーベル平和賞受賞者であるアルベルト・シュヴァイツァー博士と平和と抵抗を歌うシンガー・ジョーン・バエズは WFC の設立当初の支援者であります。

被爆者たちと広島市民に愛されたバーバラは、1969 年、アメリカに帰国する際に広島市長から「市の鍵」を贈られ 1975 年には広島市名誉市民の称号を授与されました。また最近では、2011 年の彼女の誕生日に、バーバラ・レイノルズを追叙する記念碑が平和祈念公園に建立されましたが、それは外国人としては三番目の碑であります。

9 月 11 日、12 日には、ウィルミントンカレッジで平和運動の先駆者であり忠実な核廃絶提唱者であったバーバラの生涯とその功績を讃える PRC 創立 40 周年記念会議が開かれ、レイノルズ家のご家族も数名参加されます。詳細は PRC の所長でこの会議の主催者であるターニャ・マウス博士までお問い合わせください。



バーバラ・レイノルズ記念碑「私もまた被爆者です」



ウィルミントンカレッジ平和資料センター

### 被爆 70 年の今年、アメリカで原爆の図を展示しています。

丸木美術館理事長小寺隆幸

6月13日から8月16日までワシントンのアメリカン大学美術館で Hiroshima Panels 展を開催した。(その後ボストン大学9月8日-10月18日、ニューヨークの Pioneer Works 11月8日-12月と続く)。この展覧会は被爆70年に「原爆の図」をアメリカにという呼びかけに応えた日本の多くの市民の募金で実現した。広島平和資料館・長崎原爆資料館と協同し、被爆資料や遺品も展示されている。

丸木位里(1901~1995)・俊(1912~2000) 夫妻は、原爆の3日後、位里の両親の住む広島に入り、破壊と絶望の情景を目の当たりにしながら救援活動に尽力した。その後1950年から82年にかけて「原爆の図」全15部を描いた。きのこ雲の下で人間がどのような悲惨な状況におかれたのかを示したこの図は、日本だけでなく60年代に世界各地で展示され、多くの人々に原爆の実相を伝えてきた。今回アメリカでは各1.8m×7.2mの作品を6点展示している。

キノコ雲の下の惨状を描いた「幽霊」「火」、ビキニでの水爆実験後の民衆の原水爆禁止運動を描い

た「署名」、犠牲者への追悼を描いた「とうろう流し」、原爆後日本人に殺された米兵を描いた「米兵捕虜の死」、死んでもなお差別された朝鮮人被爆者を描いた「からす」である。丸木夫妻は原爆の中で起きた事実を聴き取り、様々な視点から描いた。その点について、ジョン・ダワーは次のように記している。「丸木位里・俊 夫妻の作品のように、悲劇的で複雑、そして怒りのイメージが提供されると、歴史的な記憶が十分に蘇るのである」(“War, Peace, and Beauty :The Art of Iri and Toshi Maruki” John.Dower 1988)

1995年、スミソニアン博物館が企画した「原爆展」はアメリカの退役軍人などの猛反対により中止に追い込まれた。しかし今回は反対の動きはない。原爆投下は必要だったという声がアメリカでは今も強いが、人々の意識は少しずつ変わってきている。

今回、AP通信が“新しい展示は、第二次世界大戦終結に関して異なった視点を提供”と題した記事を配信し、ワシントンポスト、ニューヨークタイムスやTVでも報じられた。その中で、この展覧会を呼びかけたピーター・カズニック教授は次のように語っている。



「原爆の図」第二部「火」の前で  
(6月13日アメリカン大学)

## 長崎核兵器ポスター

「その展示の主な目的は、原爆によって引き起こされた人間の苦しみを描くことです。原爆は、地球の完全な破壊が可能になり、誰の未来も保障されないような時代をもたらしました。私たちは日本人を被害者としてだけでなく、加害者としても描いています。それはアメリカの原爆使用の責任を決して和らげるものではありませんが、その物語を少し複雑にしています。」

秋の国連総会に向けて、核兵器は非人道的だから禁止しようという取り組みが進んでいる。そのさなかに、アメリカ市民が「原爆の図」に向き合い、人間に何が起きたのかを心の目で見ること、この苦しみを世界の誰にも味わわせてはならないという被爆者の声が届くことを願っている。



「原爆の図」第一部「幽霊」の前で（6月13日  
アメリカン大学）



「原爆の図」の前で歌う（6月13日アメリカン大学）

例年8月6日、9日には、世界で広島と長崎を破壊した原爆が記念され、とりわけ被爆者の核廃絶の願いとともに、両市の平和ミュージアム、平和公園からメッセージが発信されます。2013年から「存在する限りは使われる—世界の核弾頭データ」という見出しの下に、核弾頭の数と種類を示したカラフルで美しいおおきなポスターが毎年作られています。このポスターは、長崎大学核兵器廃絶研究センターの世界の核弾頭データモニタリングチームのデータに基づいています。このセンターは、2012年「核兵器廃絶」という表現をその名にもつ初めての機関として設立されました。核兵器廃絶研究センターの研究を広げるため、核廃絶長崎連絡協議会（PCU-NC）が同年末に発足しました。この協議会は長崎のひとびとの「長崎を世界最後の核攻撃被害地に」という願いを反映している長崎県（P）長崎市（C）長崎大学（U）の連合体です。

このポスターには Bulletin of the Atomic Scientists（原子力科学者会報）がデザインする有名な「世界終末時計」が描かれており、人類のもっとも危機的な問題のひとつである核廃絶の必要性にかんする情報がコンパクトで印象的に表現されています。



平和ミュージアムにならどこでもあります。以下のアドレスから見る事が出来ます。



<http://www.recna.nagasaki-u.ac.jp/recna/en-database/nuclear-weapons>.

コピーがご入り用の方は

[skiyama@nagasaki-u.ac.jp](mailto:skiyama@nagasaki-u.ac.jp)

までお問い合わせください。

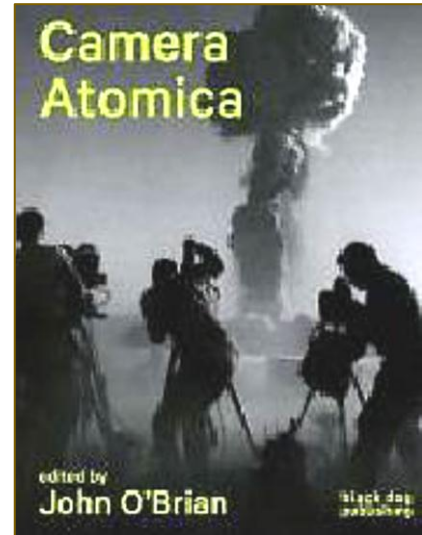
## カメラアトミカ Camera Atomica オンタリオのアートギャラリーでの展覧会

展覧会「カメラアトミカ」は、1945年広島原爆投下から、2011年福島第一原発メルトダウンまで、第二次世界大戦後のすべての核関連事件を撮影した作品の展覧会で、カナダ、トロント市のオンタリオアートギャラリーで7月8日から11月15日まで開催されています。

この題材をあつかったものとしては初めてでかつ充実した内容のこの展覧会は、写真が核兵器、核エネルギーの概念形成に重要な役割を果たしてきたことを証明しています。展示は広島、長崎の被爆者、核実験、核拡散、反核運動、放射線の人体影響、核エネルギーと汚染廃棄物をテーマにしています。

200余の作品群のうち一枚目は、1895年にウィルヘルム・レントゲンによって撮影された彼の妻の手の写真です。ブリティッシュコロンビア大学芸術史研究者で客員館長のジョン・オブライエン氏は、今世紀のもっとも痛烈な写真とさらに多くの核エネルギーにまつわる作品を取りまとめ、出版物、美術、科学、観光案内、宣伝広告の写真など、さまざまな出典の新旧織り混ぜた作品をテーマに沿って展示しました。「カメラアトミカ」の前半に展示された核画像のセレクションは、ロンドンのワークギャラリーで、2014年10月10日から12月20日まで「閃光のあと：原子力関連資料からの写真展」(*After the Flash: Photography from the Atomic Archive*)と題して公開されました。

オブライエン氏編集で、Black Dog出版社とアートギャラリーオンタリオとの共同出版で「カメラアトミカ」と題するたくさんのイラスト入りの充実した論文集も刊行されています。



## テヘラン平和ミュージアム イランの年間博物館賞に輝く

テヘラン平和ミュージアムは、多忙な第二 4 半期で、「国際博物館協議会イランの部」が開催した2015年5月8日、世界博物館の日の式典で、「イランの年間博物館（民間部門）」に選ばれました。国際博物館協議会、ユネスコ、テヘラン市協議会代表が列席した式典では、テヘラン平和ミュージアムは来館者数、創造性と革新性、経営改善の点で特別な評価を受けました。また、研究・導入のプログラムに対して特別な表彰を受けました。2013年には、来館者数、創造性と革新性、文化と歴史遺産の紹介、文化歴史的所有物の収集といった部門で優れた博物館として認められました。第一次世界大戦中、世界で初めて毒ガス攻撃が行われたベルギーのイープルで、4月22日から24日にかけて毒ガス攻撃100周年を記念した「大量破壊兵器から100年：繰り返してはならない」と題する会議が行われ、テヘラン平和ミュージアム

の代表団が参加しました。イランの毒ガス被害者でミュージアムガイドのハッサン・ハッサニ・サーディ氏がイーブル市長によってこの行事に招待されました。サーディ氏は、自身の毒ガス被害の体験を講演し、他の参加者も会議期間中、テヘラン平和ミュージアムでの被害者たちの平和ボランティア活動を「毒ガスから平和へ」と題して展示しました。今年4月29日の国際化学兵器犠牲者追悼の日に、テヘラン平和ミュージアムは、この100年前の時代に焦点を当てることにして追悼を続け、イラン-イラク戦争の退役軍人たちへ化学兵器攻撃がどんな影響を及ぼしたかについての注目を喚起しました。国連駐在コーディネーターのゲリー・ルイス氏は講演の中で、すべての化学兵器被害者の人たちに起立をうながし、かれらの母国への貢献を讃えました。式典では、また医療補助員で1986年スーモアで毒ガスに被災した故・ジャハンシャ・サデギ氏を顕彰しました。サデギ氏のインタビューは下のアドレスへどうぞ。

<http://www.tehranpeacemuseum.org/index.php/en/oral-history/194-english/oral-history-en/951-jahanshah-sadeghi-en.html>



テヘラン平和ミュージアムの前で、4月29日  
化学兵器犠牲者による国際化学兵器犠牲者追悼の式典

テヘラン平和ミュージアムの平和アートプロジェクトの一環として、いくつかの展覧会が開かれました。5月25日から始まった「沈黙の人形たち」と題する展覧会は、近年の中東における戦争で犠牲になった子どもたちを追悼するものです。また「友情の色」という展覧会が、テヘラン市アンディシエー文化センターとハディ子ども教育センタ

ーの共催で5月30日、31日に開催されました。広島平和記念資料館主催の第29回こどもたちの平和の絵コンクールで2名のイランの少女が入賞しました。8歳のヤス・ロスタンポー・カクルーディさんが特選広島市長賞を受賞、12歳のヘリエー・デナリさんも入賞しました。

### 李儁（イ・ジュン）平和博物館、ハーグ



イ・ジュン平和博物館

第二次世界大戦の終結は、同時に朝鮮の日本植民地支配からの解放を意味した。侵略に抵抗した朝鮮の英雄にちなんだ李儁平和博物館は、8月15日に記念イベントを行う予定である。ハーグ近郊ライツヘンダムにある李儁記念教会で、韓国大使、市長、韓国特使ら列席の下、式典と音楽の演奏で開会される。その後、1995年の開館から20周年を迎える博物館（1907年の第二回ハーグ平和会議の間に李儁が死去した元ホテル）と、李儁の墓地を訪れる。プログラムは、韓国合唱団による歌や韓国伝統楽器の演奏も含まれる。博物館の世界平和と和解への強い祈りを込めて、韓日合同の四重奏団による演奏も行われる。メインイベントに、韓国語で「祭」を意味する名前の有名なアーティストグループ PAN のメンバーがパフォーマンスを

行う。

伝統と現代の韓国音楽、ダンス、ドラムの融合により、命を讃える色彩、音楽、躍動にあふれた豪華な舞踊劇となる。PANの12人の素晴らしいアーティストらは、この8月、今年のエジンバラ・フリッジ・フェスティバルに登場する。

### エンヴィジョン平和博物館 ワシントンDCの会議に参加

博物館長代理トニー・ユンカーと展示プログラム・ディレクターのエリザベス・ティンカーは、ワシントンDCにあるアメリカン大学での「経済ビジネスと平和」会議においてエンヴィジョン平和博物館の展望を発表した。ワシントンDCのアメリカ大学コゴッド・スクール・オブ・ビジネスは、「経済ビジネスと平和」隔年会議の2015年の会場であった。2日間に渡る会議は、積極的で達成可能そして具体的な人間の幸福と成長の手段としての平和に世界の焦点をシフトさせることに献身している非営利シンクタンク「平和経済研究所」が協賛した。エンヴィジョン平和博物館のトニー・ユンカーとエリザベス・ティンカーは、平和とよくみられる紛争の4つの原因（①経済、②環境、③文化と独自性、④政治と社会）の相互関連性を扱った5部門にわたる「コーナーストーン展」の企画を発表した。第5部は要約と総括となる予定である。最初の部分である「平和と経済」は2016年春に完成する。この展示は、ビジネスや経済がいかに平和と関係しているのか、またどう助け合えるかを探る。

ビジネス、政策、国際関係、経済、統計学に関わる大学院生や学部上級生、研究者や個人たちが2日間にわたり、経済、ビジネス、平和という主要テーマについて議論した。トニー・ユンカーはその経験についてこう語っている。「この成長しつつある重要な学問領域を見出し、その多くがキャリ

アを始めたばかりの素晴らしい才能にあふれこの大義への献身をささげる数多くの研究者らと会うことができ、大変満足している」エンヴィジョン平和博物館の「コーナーストーン展」が完成すれば、様々な場所を巡り、エンヴィジョン平和仮想博物館の一部としてオンラインで公開、最終的にはフィラデルフィアの実際の博物館の建物内にて展示されることになる。刺激的で実際的な展示とイベントを通じて、エンヴィジョン平和博物館は、平和と正義の構築の効果的アプローチを劇的に表現していく計画だ。博物館の目標は、暴力と不正の現実的解決策普及のための主要な場となり、革新的なアイデアや訪問者の深い体験で知られるようになることである。エンヴィジョン平和博物館の詳細は、次のアドレスへアクセスして下さい。

<http://www.envisionpeacemuseum.org/>



トニー・ユンカーとエリザベス・ティンカー

### 共感博物館

今年中に英国ロンドンにて、世界初のいわゆる「共感博物館」が開館する予定だ。移動式のエコ・バスに載せられてあちこちを移動しながらイベントを行う。学校やギャラリー、ショッピングセンターやオフィスなど人が集まる場所を訪れるアトラクションとなる。英国の後には、オーストラリアで



パース国際アートフェスティバルに参加、そして他の国へと巡回する。

英国の著名なライフスタイル哲学者の1人であるローマン・クスナリクの着想で作られたこの博物館、彼によれば「他の人の生活へ想像の旅をするための体験型冒険空間」である。この博物館のアイデアは彼の本「共感：なぜ重要なのか、どうやって手に入れるのか」（2014年米国ペンギンブックス、2014年英国イーバリー出版「共感：変革へのハンドブック」）から生まれた。クスナリク的主張によれば、事実上全ての人々が共感し他人の立場で世界を見る能力があるにも関わらず、その共感力を最大限に使っている人はとても少ない。彼の10年間の研究は、人々がいかに共感力を高めることができ、それによって日々の偏見と暴力的確執を断って、人間関係を改善し、想像力を高め、優先事項を見直し、社会的問題に立ち向かうことができるかを示している。共感とは、人間関係を個人的から国家的へと変え、根本的社会変革を生み出す力があるとクスナリクは主張する。

エンパシー博物館、エンパシー図書館、その他エンパシープロジェクトや著書については

<http://www.empathymuseum.com/>

創作者ローマン・クスナリクについては

<http://www.romankrznic.com/>

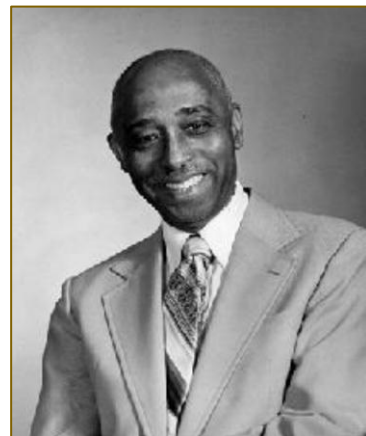
をご参照下さい。



### 米国デトロイト チャールズ・H・ライト アフリカ系アメリカ人史博物館

今年、チャールズ・H・ライト アフリカ系アメリカ人史博物館は、創立 50 周年というその歴史の大

きな節目を迎える。8月の記念日に合わせ、博物館を創設した人物、チャールズ・ハワード・ライト医学博士（1918-2002）の人生に焦点をあてた展覧会を行う。素晴らしい医師であり、造詣深い知識人であり、社会に熱心に献身した彼の人生、言葉や画像、書類や資料を通し、彼の大きな遺産を集約した展覧会である。ライト医師は人生を通し、彼が言うところの「我々の時代の最重要課題のひとつ」に身を投じた。未来の世代、特に若いアフリカ系アメリカ人たちが、彼らの先祖とその並外れた自由への葛藤の歴史を知り、誇りを持つようにである。アフリカ系アメリカ人の歴史と文化のために作られたものでは世界最大のライト博物館は、その重要課題を達成する彼の歴史的に価値のある努力による最高の業績である。ライト医師は、成人して以降の人生全てを、全ての人の自由と正義と平等のために闘うことに費やした。医療業界での差別的な慣行に異議を唱え、公民権闘争に参加して自らを困難な道へと追い込み、慈善事業を立ち上げてアフリカ系の医学生へ金銭補助を行った。ライト医師は、婦人科医、産科医、施設創設者、作家、劇作家、映画製作者、夫、親として社会に貢献した。そして、ルネッサンス的教養人としても。彼の医療以外の著書に、もう1人のアフリカ系アメリカ人についての短編「ポール・ロブソンの平和論」（1984）がある。詳細については <http://www.thewright.org/> を参照。



チャールズ・ハワード・ライト医学博士

## 自転車に乗ろう！ 平和の配当を手にしよう！

ドイツのニュルンベルク平和博物館と「地球の友」の地元グループは、毎年1～2回、地域にある軍用転用地区へのガイド付き自転車ツアーを開催している。元米軍基地はとて数多く存在する（そして、数は少ないにしてもドイツ連邦軍基地も！）。冷戦が終わり、それらの地区は官庁に返還されたり、市制機関がドイツ連邦大蔵省から買い取ったり（！）した。そして、都市住宅地域、自然保護区、商業地区など、考えられる全ての類の「平和の配当」に「転用」された。

ツアー内容は様々であるが、全て家族向けであり、日曜の午後に4時間開催され全て10km以内の距離だ。「死の地区から生命の地区へ」の転換を、典型的平和活動家ではない普通の人々に見てもらおう。時には、米国の元核兵器保管場所や掩体壕の短距離大砲弾に案内することもある。今日においては、核の兵器で自らの国を破壊していたという冷戦の狂気は信じがたい。ツアーでは、歴史や都市計画、自然について多くを大変楽しく学ぶことが出来る。転用地の多くは自然保護区になっており、「地球の友」の認定生物学者が様々な生物種を案内する。次回のツアー（9月6日予定）では、エアランゲン（人口105,291人）の転用プロジェクトに向かう。そこにある米国の「フェリス・バラックス」は、二ヶ所の巨大な戦車・大砲訓練所を含めて使用されていないままである。1997年、市が連邦大蔵省より転用地を購入した。新しい「レーテルハイムパーク」地区は、新しい先端技術の「メディカル・バレー（従業員2,000人）」に近く、素晴らしい都市計画による住宅地として高く評価されている。軍事訓練エリアは、娯楽価値の高い自然保護地区となっている。森の中の元核兵器倉庫では、太陽光発電が環境に優しいエネルギーを作っている。当館の目標は、この成功例を長く奮闘してき

た地域の「核兵器倉庫に反対する平和イニシアティブ」と結びつけることだ。平和博物館として、平和活動の「歴史」を提示していきたいと考えている。それは、このような生きた「自転車ツアー」で最大限に発揮されている。自転車ツアーのみならず当館の企画の詳細については、ご連絡いただくか、フェイスブック（下記アドレス）で「いいね」をクリックして下さい。

<https://www.facebook.com/Friedensmuseumface>

## 平和に飢えて ウィーン平和博物館のイベント

ウィーン平和博物館では、文化的理解が平和への第一歩であると感じ、食べ物を通じてそうした理解を深めたいと考えている。こうした背景の中、戦争とテロの国であるというアフガニスタンの一般の見識を覆しアフガニスタン国民が平和を愛する人々であるということを伝えるため、ウィーンにあるアフガニスタン文化協会の後援によるイベント「ピース・キッチン」が先日行われた。基調講演者であるアフガン文化協会のゴーシュディン・ミール氏は、アフガン文化と伝統について、また「ピース・キッチン」のようなイベントの重要性を語った。そして、アフガニスタンの国民的料理を紹介しその調理法について説明した。ミール氏はまた、国家や武装組織の軍縮の必要性を強調し、西洋諸国がますます多くの兵器を製造しその偽善を続ける限り世界の平和的共存は不可能だと強く訴えた。「我々は平和を愛し、平和のために貢献していると自分自身を偽っている。西洋諸国が殺人のための兵器を製造し国々や非国家組織にばらまく限り、平和を実現することはできない」と何度も語った。

「ピース・キッチン」はウィーン平和博物館の中庭で始まった。博物館長のアリ・アハマド博士が、食べ物を他の人たちと「分かち合う」重要性を言



及し、イベントを開会。世界の何百人もの人々が食物を入手できない状況にある一方で何十億ドルもが軍事や兵器に費やされていると彼は語った。国家による「防衛システム」を構築する代わりに、軍事費を慈善事業に使ったほうがもっと容易であり実用的でもある。「兵器は命を破壊するが食物は命を与える」アハマド博士はそう述べた。

ウィーン平和博物館創設者リスカ・プロジェクトは、世界の貧困への懸念を表明した。彼女は、世界の政治化らが戦争に注目するのをやめ平和へ焦点を当て始めることが必要だと強調した。また、平和の理想を地域社会に広めるべきだとイベント参加者達に促した。

「私達自身が責任をもって平和意識を持ちながら、全ての地域社会において平和の認識を築くことが緊急課題である」プロジェクト氏は述べた。

イベントの第2部では、アフガニスタンの音楽家イシャク・ラメシュガルがアフガンの伝統的なラブソングを伝統楽器であるタンブラにのせて歌った。タンブラとは、インド亜大陸の民謡伴奏によく使われる指板の長い二弦楽器である。音楽の後には、マウラーナ・ジャラルディーン・ルーミー・バルキと彼の詩について議論が交わされた。ルーミーは13世紀のペルシャの詩人であり、法学者、神学者、イスラム神秘主義者でもあった。アフガニスタンで生まれた彼は、最も新しい平和の英雄だと最近ウィーン平和博物館によって評価された人物である。



ウィーン平和博物館の平和の旗を持つ集合写真

## 見えない糸：杉原の命を救うビザと バンクーバーへの旅

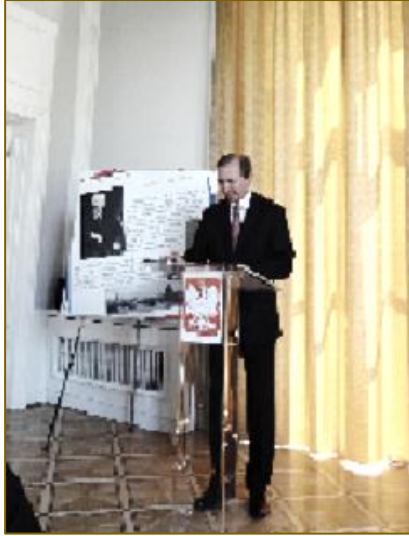
バンクーバーと横浜市の姉妹都市 50 周年を記念し、バンクーバー海洋博物館は 4 月 10 日から 7 月 1 日の会期で「見えない糸：杉原の命を救うビザとバンクーバーへの旅」を開催する。

この展覧会は、第二次大戦中、リトアニアの日本副領事だった杉原千畝によって発行された日本通過ビザを使用して占領下の欧州から亡命した何千人ものユダヤ人難民の物語を語る。杉原は国の直接命令に反し、約 4,500 の通過ビザを発行、難民らに日本入国を許可した。神戸港や横浜港から多くのユダヤ人亡命者らが太平洋横断する日本郵船に乗り、シアトルやバンクーバーに無事に到着した。杉原のビザを受けた者とその子孫たちの広大なネットワークは今や世界中に広がり、何千人もの人々を繋げている。



## ハーグでのイヴァン・ブロッホの セミナーと本の紹介

6 月 11 日にハーグのポーランド大使館は、イヴァン・ブロッホの伝記が初めて英語で出版されたのを機に、INMP の協力を得て、彼のハーグでの遺産を讃える会を催した。ブロッホは「鉄道王」であり、1898 年に出された 6 巻から成る、先見的な



ポーランド大使 Dr. Jan Borkowski

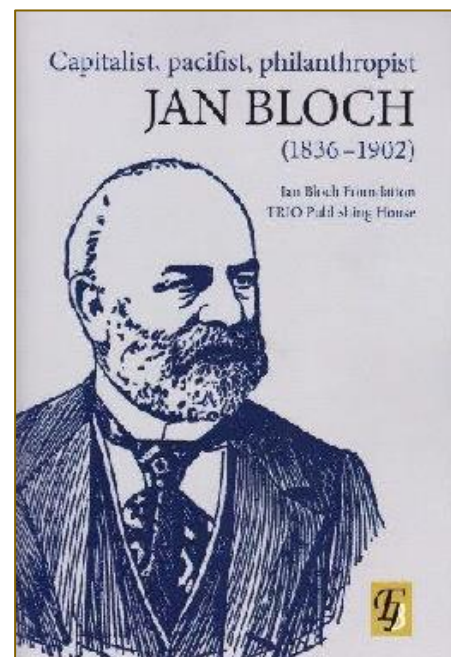
『将来の戦争』の著者だが、第1回ハーグ平和会議(1899)に招待され、ニコラス2世に影響を与えた人でもある。彼は、ベルタ・フォン・ズットナーと共に最も卓越したロビイストで、壊滅的な戦争を防ぐための調停や武装解除を促した。1902年には、彼が出資した世界初の平和博物館「国際戦争・平和博物館」が、スイスのルツェルンに開設された。

出された本は『イヴァン・ブロッホ (1836-1902) 一資産家、平和主義者、慈善家』で、題にある3分野の専門家が、ブロッホの功績や価値を記している。ポーランドの元外交官アンジェイ・ゾル氏編著で、ワルシャワのTRIO出版社とブロッホ財団が出版した。ポーランド語版では(2014年8月INMPニューレターで言及)、INMPのピーター・ヴァン・デン・デュンゲンさんとマーチン・ヴァン・ハーチンさんが新たに2章を加えて、さらに内容が豊かになっている。平和と正義の国際都市ハーグの歴史上、ブロッホの重要性が強調されたのである。

セミナーはポーランド大使イヴァン・ボルコヴスキー博士によって始められ、ポーランドから招聘された講演者と40名ほどの参加者が集った。大使もINMPの仲間も、平和研究や平和教育の先駆者

ブロッホの姿を見たいと切望し、ピース・パレスに胸像を置き、デリゲンシャ劇場に額を飾り、彼を思い起こして崇めた。今では伝説になっているが、その場は1899年6月にブロッホが4回も公式の講演を行なった所である。

ブロッホは誰よりも大戦に警告を発し、防ごうとした人なので、第一次世界大戦100年の記念の年に、この本がハーグのポーランド大使館で紹介されるのはとてもふさわしいことである。詳しくは<http://bloch.org.pl/en/events/150-seminar-in-hague> を参照。



## 文化遺産と和解

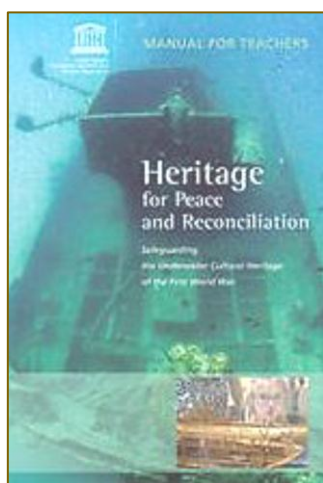
第一次世界大戦100周年に向けて、UNESCOは「平和への文化遺産と和解」という教育プロジェクトを展開させている。(2014-2018) 最近出された『平和への文化遺産と和解：第一次世界大戦の水中遺産の保護』は、教員たちにとって魅力ある独創的な本である。(Paris: UNESCO, 2015, pp.160)

ダーク・ティママンさんとウルリケ・ゲランさんによって書かれたが、写真や図も多く、文化遺産

に基づく平和教育、平和関連の文化遺産教育に関心のある教員にとって、役立つであろう。水中文化遺産に焦点を当てられているが、紹介されている内容や方法論は適用範囲が広い。第一次大戦の目新しさの一つは潜水艦戦闘だが、潜水艦遺産が多く残っているという事実もあり、2001年のUNESCO 水中文化遺産保護条約とも関連している。文化遺産に基づく記憶教育は、3つの視点—知識と洞察力、共感と連帯、熟考と行動から成されるべきだと例証されている。例えば、水中遺産に基づく和解の話は、1941年ハワイのパール・ハーバーに沈んだ戦艦アリゾナの残骸に関して紹介されている。(水中遺産は第一次世界大戦に限られていないことが判る)

この書には UNESCO と平和教育の歴史、詳しい授業プランなど、便利な付録も付いている。

[http://www.unesco.org/new/fileadmin/MULTIMEDIA/HQ/CLT/pdf/Heritage\\_for\\_Peace\\_and\\_Reconciliation.pdf](http://www.unesco.org/new/fileadmin/MULTIMEDIA/HQ/CLT/pdf/Heritage_for_Peace_and_Reconciliation.pdf)



吉田 俊 (たかし) 著  
『戦争の文化から平和の文化へ：  
日本・中国・韓国の戦争・平和博物館』

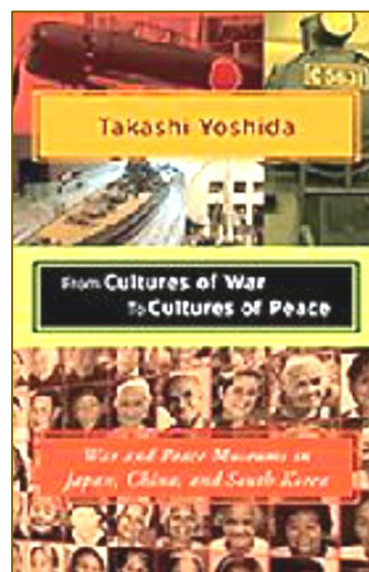
書評：山根和代

吉田教授は日本だけでなく、中国や韓国の戦争・平和博物館についても分析している。大衆メデ

ィアは、日本人は第二次世界大戦の歴史を真摯に認識していないと報じがちだが、彼は日本の19の平和博物館を紹介し、多くの日本人は日本の他国への侵略という不正に向き合うことの大切さを受容していると論証した。南守夫氏（愛知教育大学元教授）によると、戦争と平和博物館への来訪者数はほぼ同じだが、戦争博物館は戦争を美化する傾向があり、国粋主義者に支持されているという。吉田氏は、国粋主義者たちが活発になり、1931年～1945年に日本を支配していたのと同様の戦争文化が進んでいると、現在の危機的状況を明示している。一方で、日本の戦争犯罪が正直に扱われている平和博物館を挙げ、日本の平和文化についても記している。

この書では、戦争と平和博物館の学問的議論を英語で学べる上に、日本の侵略について真摯に伝えているミュージアムに関しての新しい情報を得ることもできる。例えば、第二次世界大戦の間、従軍慰安婦として働かされていた女性に焦点を当てるアクティブミュージアム—女たちの戦争と平和資料館である。

日本で最もよく知られている博物館は広島平和記念資料館と長崎原爆資料館だが、彼は、埼玉の丸木美術館と東京の第五福竜丸展示館も共に反核博物館であり、丸木美術館は南京大虐殺の犠牲者のことも扱っていると指摘している。





秋田県花岡の鹿島では、第二次世界大戦中の炭鉱で約 1000 人の中国人が強制労働させられたが、花岡の平和活動によって 20 世紀の末までに、日本の侵略と植民地主義が捉えられたことも示している。

この書は、花岡平和記念館(2010)や埼玉県川越にある中帰連平和記念館(2006)も紹介している。吉田氏の本は、日本の平和ミュージアムを丹念に論じることで、日本の戦後の平和文化の知識を拡げる貢献をしているのである。ただ、2011 年に韓国に設立されたノグンリ平和記念館については触れられていない。読者には、朝鮮戦争の歴史や人権向上と平和への課題についても学んでほしいと願う。

『一周して元に帰る』—平和の巡礼  
ロイ・タマシロー  
(アメリカ ウェブスター大学)

この巡礼は、ロイ・タマシロー氏が初めて広島を訪れて、平和研究をライフワークにしようと決めてから 50 年の記念となる旅である。彼の研究には原爆の証人（ヒバクシャ）の口述記録、平和博物館の役割、変形学習と平和意識の心理学がある。

7月31日、カリフォルニアのハンボルト郡において、彼は「核時代と平和意識の高まり」について話した。彼は「私の巡礼がハンボルト郡から始まるのは、ふさわしいことです。というのはゴールデン・ルールと命名し直された船が、核兵器についての意識に目覚めるために巡礼の旅を始めたことと、一致するからです」と言う。この歴史的な平和船は、最近「平和のための退役軍人」(U. S.)と賛同者によって復活され、1958年に核実験が行なわれたマーシャル諸島まで航海し、核兵器の大気圏実験に反対の国際的運動に奮起することになったのだ。

タマシロー氏は、被爆者である近藤紘子さんの注目すべき話も紹介した。近藤さんは 10 歳の時に、原

爆を投下し広島を破壊したエノラゲイの、副操縦士だったロバート・ルイス大尉と会った。ルイスの深い悔恨の言葉「神よ、私たちは何をしてしまったのか」を耳にして、原爆を落とした人たちへの怒りや憎しみ、復讐の感情が消えたというのである。

ロバート・ルイス大尉は広島に原爆を投下し、その結果を見るために戻った時に「ああ神よ、我々は何をしたのか」と書き残していた。近藤さんの直観は、禅僧・河野大通さんが「自分が変わると世界も変わる」と述べたように、多くの人、特にロイ教授の学生たちを感動させた。個人の覚醒が次々に他者を動かすのである。

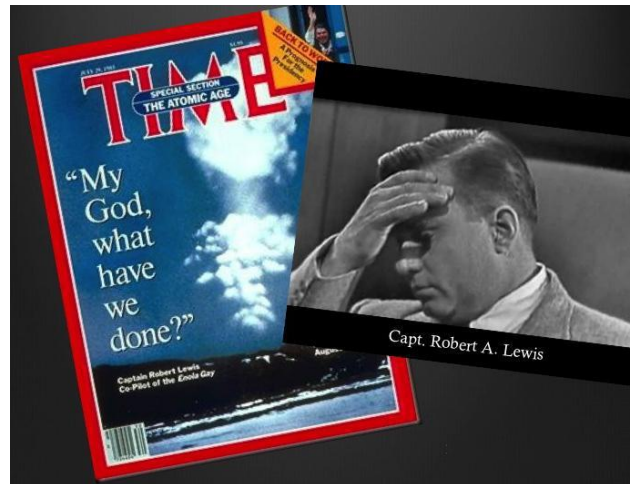
8月2日に彼は、ハンボルトのユニテリアン・ユニバーサル教会の礼拝で、広島や長崎は深い苦しみの場から、平和と思いを発する神聖な場へと進化したと述べた。また、広島に原爆投下された8月6日には、広島の平和の鐘の複製が近くにある、ホノルルの広島記念平和礼拝で、被爆者を追悼し黙想を行なった。その2日後には、やはりホノルルで「記念と平和意識の学習会」を持った。これは、2015年国際平和学会の学習会、韓国(8月17~22日)、京都の立命館大学(10月19日)の学習会へと続くものだ。学生たちは学習会を通して、心して他者や自分自身の苦しみの声を聞くことで、いかに「平和の意識」を高めるかを学ぶのである。



「ピースおおさか」におけるウェブスター大学の学生とタマシロ教授

彼は、ウィルミントン大学（アメリカ、オハイオ州）の平和資料センター40周年記念の会議（9/10-11）では、平和活動家や平和巡礼とは何をすべきかを追求する。また、2015年4月の地震からの復興途上にあるネパールのカトマンズで、10月9～11日に開かれるアジア太平洋平和研究学会（APPRA）大会では、「核時代の意識への変容教育」について発表する。彼はその会議への道中、ブッダ生誕の地であるルンビニを訪れた巡礼者の足跡を、2500年以上経て辿ることになるだろう。さらなる情報を望む方は下記へメールして下さい。

[tamashiro@webster.edu](mailto:tamashiro@webster.edu)



## 立命館大学国際平和ミュージアム

「平和のための博物館国際ネットワーク」（INMP）と「立命館大学国際平和ミュージアム」は同じ年（1992年）に設立されたが、当初から、ミュージアムはINMPを強く支援していた。

（2つの国際会議の主催、平和博物館に関する本の発行など）。以下はINMPが心から支持する、ミュージアムの現館長と名誉館長による声明である。

### 〈第二次世界大戦終結70年にあたっての声明〉

立命館大学国際平和ミュージアムは、1992年、紛争の原因を取りのぞき、人間の可能性を豊かに開花させるために大学が果たすべき社会的責任の自覚の上に、「平和と民主主義」の教学理念を体現する社会開放施設として設立されました。その後、学校法人・立命館は2006年に「立命館憲章」を定め、アジア太平洋地域に位置する学園として、歴史を誠実に見つめ、国際相互理解を通じた多文化共生の学園を確立することを宣言し、教育・研究機関として世界と日本の平和的・民主的・持続的発展に貢献することを誓いました。そして、2010年に開催された「アジア太平洋学長平和フォーラム」は、中国・台湾・韓国・ベトナム・タイ・インドネシア・アメリカ・カナダ・オーストラリア・日本の11大学の学長の共同声明を発し、立命館憲章の精神と理念についての認識を共有し、次世代を担う人材教育の面での国際平和ミュージアムの社会的・教育的意義を確認しました。国際平和ミュージアムは、「過去と誠実に向き合う」ことを展示原則として、戦争の被害と加害の両面に目を配りつつ、常設展の充実や100回近い特別展・ミニ企画展の開催に取り組み、延べ95万人を超える参観者を迎え入れてきました。また、寄贈・寄託資料を含む4万2千点に及ぶ収蔵資料の登録・保管・調査・公開に関わる業務を進め、メディア資料室に収蔵する約4万5千点の平和関連の図書を学内外の利用に供してきました。第一次世界大戦期から100年、第二次世界大戦終結から70年の今年、当ミュージアムは、更なる発展をめざして「平和研究センター」の設立に向けて努力を傾注しています。私たちは、「理念としての平和の諸問題」にとどまらず、「現実としての国内外の平和の諸問題」に関する調査・研究を進め、「平和と民主主義」を教学理念とする大学に相応しい教育・研究機能の発展に努めたいと願っています。また、今年には戦後70年平和企画として戦後史研究を踏まえた特別企画展を開催し、戦後史を

踏まえつつ現代の諸問題に取り組む平和博物館としての姿勢を明確に示す方向を打ち出しています。ひるがえって日本の安全保障をめぐる国会の動向や、平和博物館における加害展示後退などの状況を見ると、私たちは、「平和と民主主義」に関する重大な岐路に立っていることを再認識するとともに、憲法学や歴史学の学問的成果を蔑にしようとする「権力の横暴」ともいうべき事態に重大な危惧を抱いています。とりわけ、戦後の日本の平和を支えてきた基本的枠組みとも言うべき日本国憲法を改変しようとする性急な政治動向や、「平和安全法制」の名において他国の軍事紛争に巻き込まれる懸念を増大させ、近隣諸国との安全保障環境を悪化させかねない危険な状況については、深刻な問題意識を表明せざるを得ません。

立命館大学国際平和ミュージアムは、国内外の平和博物館と共同して国際ネットワークの発展や共同事業の実現のために努力してきましたが、戦後70年に当たり、今後とも平和博物館としての展示事業や調査・研究、平和教育さらには、社会的共同事業の発展のために一層の努力を重ねる所存であることを声明いたします。

2015年6月30日

立命館大学国際平和ミュージアム

館長 モンテ・カセム／名誉館長 安齋 育郎



国際平和ミュージアムの戦後70年企画ポスター



## 編集ノート

編集委員メンバーは安齋育郎、ピーター・ヴァン・デン・デュンゲン、ロバート・コワルチェック、山根和代です。翻訳は谷川佳子さん、竹田敦子さん、寺沢京子さんが担当して下さいました。

INMPの会員そしてニューズレターの読者のみなさん、随時ニュースなどの投稿をお願いします。原稿は随時、英語で500単語以内、写真は1-3枚。あなたの名前と所属を書いて、news@inmp.netに送付してください。英語で書くことに困難がある場合には下記にご相談ください。

### 平和のための博物館 国際ネットワーク (International Network of Museums for Peace, INMP)

を支え、さらに発展させるために、新たな会員を迎え入れることが期待されています。現在の年会費は2000円、日本での会員事務、下記の「安齋科学・平和事務所」が代行しています。

INMP 日本事務所：安齋科学・平和  
事務所 (ASAP)

※事務局は月・水・金の午後13時～17時30分に開いています。

電話：075-741-7267 FAX:075-741-7282